The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「阪大生のためのアカデミック・ライティング入門」ライティング指導教員マニュアル
Author(s)	堀, 一成; 坂尻, 彰宏
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51132
rights	
Note	こちらは旧版です。最新版（第3版）は次のURLから取得できます。http://hdl.handle.net/11094/54513

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「阪大生のための
アカデミック・ライティング入門」
ライティング指導教員マニュアル

2015 年 2 月 10 日　Version 2.0

大阪大学　全学教育推進機構
堀　一成、坂尻　彰宏

目次

1 はじめに 1

1.1 ライティング教育で必須の事項 1

2 大阪大学　アカデミック・ライティング教育の現状 3

2.1 学生（特に新入生）は何がわかってないか 3

2.2 学内アカデミック・ライティング指導の諸活動 4

3 学生配布小冊子の紹介 5

4 ライティング指導すべき項目案 6

4.1 大学入学までの作文などとの違い 6

4.2 要求する形式 6

4.3 剽窃・引用・倫理問題 7

4.4 アカデミック・ライティングの組み立て方のこつ（自分の経験を語る） 7

4.5 パラグラフ・ライティングと用語（分野による違い） 8

4.6 提出物評価の具体的方法と基準の説明 8

4.7 無用な苦手意識の払拭 8

4.8 小冊子に加え、参考にすべき書籍情報など 8

5 1 コマ 90 分で基本的な説明をする場合の提案 9

6 ルーブリックを作りましょう 11

6.1 ルーブリックとはなにか 11

6.2 ルーブリックをどう活用するか 11

6.3 ルーブリックの例 11

1　はじめに

大学生に書く力を獲得させる教育の必要性は、近年特に強く主張されているところです。大阪大学でも、これまで以上にアカデミック・ライティング教育を推進していく必要があります。まずフレッシュな学部初年次生に基本をきちんと教えることは最も重要だと考えます。

そのような教育活動は、特定の部署や特定の教員のみが引き受けるものではなく、全教員が意識して携わっていかねばらないことだと筆者らは考えています。それは、学生（特に学部初年次）がライティングを学ぶにあたって、**学術的文章を書く機会とそのフィードバックを受ける経験とを少しでも多くすることがなにより重要だ**と考えるからです。また、一般的な項目についての指導に限られるライティングセンターなどの組織と異なり、各教員はそれぞれの科目内容や学問分野の特殊事情にまで踏み込んで指導できるのは大きな利点です。

その活動の一環として、筆者らは 2014 年 4 月に「阪大生のためのアカデミック・ライティング入門」(第 1 版) と題する小冊子を作成し、学部新入生に配布いたしました。この小冊子は、筆者らがこれまで数年にわたって実施してきたライティング講習会やライティング関連の基礎セミナーで得た知見をまとめ、アカデミック・ライティングで必要な心構えや手法を最小限の内容に絞って紹介したものです。

このマニュアルは、2015 年 4 月に発行する、上記小冊子の第 2 版 [1] を利用し、ライティング教育を試みられる大阪大学の教員の参考になればと思い、作成したものです。筆者らが講習会や基礎セミナーで教育実践した際の経験や受講生からのフィードバックで得られた知見を共有し、各自が教育に当たられる際の資料としてくだされば幸いです。

本稿の題名をマニュアルとしていますが、この内容を各教員に強制する意図は全くありません。また、このマニュアルに書かれていることのすべてを科目内で実施するよう要請しているものでもありません。すでに科目中にライティングを取り入れ実践している方は、それを続けていただければ結構です。ご自分の科目での実践に際し、手がかりを求めている方の参考になる事があれば、取り入れていただきたいと思います。

1.1　ライティング教育で必須の事項

マニュアル中のどの事項を取り入れてくださるかは、各自の判断にお任せするところですが、それでも以下のような項目は、多数の教員が繰り返し繰り返し課し、受講生が聞き飽きた・やり慣れたと漏らすくらい定着させるべきことかと思います。だれか別の教員が説明しているだろうと思わす、ぜひご自分の実践に加えてください。

1. **アカデミック・ライティングは一定の手順と型にしたがって書くものだということを簡単に説明したうえでレポートやレジュメの課題を出してください。**
2. **課題を出す際には、学生用の小冊子を利用して作成の手順や型について、簡単にポイントを説明してください。概要や特に重要な点だけ話して、あとは各自で読むよう指示することで十分です。ぜひルーブリックも提示してください。**

3. 提出された文章に簡単な評価をして返す（フィードバック）ことをしてください。細かい添削やコメントは必ずしも必要ありません。ルーブリックを利用した簡単なものを付けるだけで十分です。

筆者らは、各科目内でのライティング指導の際に、いわゆる細かな添削は必ずしも必要ないと考えています。なぜなら、書くのはあくまで学生の仕事だからです。教員の添削によって、提出されたその文章がテニヲハのレベルまで美しくなったとしても、「書き手」がアカデミック・ライティングの手順や型を理解していなければ同じことを繰り返してしまいます。初年次の学生にとっては、細かな文章術に属する事柄より、なぜこのように書くのか、どうやって書くのか、どこがどのように評価されるのか（＝どこが重要か）を理解するほうが重要です。後述するルーブリックなどを活用してくださり、学生自らが気づき、向上していくきっかけを与えることを意識してくださるようお願いします。このことは、教員側の負担軽減と、ライティング教育へのやる気向上にもつながることだと思います。

謝辞

このマニュアルは、2010 年 6 月より図書館で開催している「レポートの書き方講座」をはじめとする講習会実践の経験が基になっています。開催に協力してくださっている大阪大学附属図書館の多くの関係者の方々に感謝いたします。また学生用小冊子の作成と配布、「情報活用基礎」や「基礎セミナー」での実践に際し、全学教育推進センターとサイバーメディアセンターの方々の協力を得ました。第 1 版の小冊子に対する 2014 年度 1 年生クラス代表によるアンケート結果や、2014 年度版の教員マニュアルに対する教員にからの意見集計結果は、小冊子とマニュアルの第 2 版を作成する、重要な参考情報となりました。小冊子の装丁デザインは、大阪大学クリエイティブユニットに担当していただきました。あわせて、感謝いたします。

筆者らがライティング教育の知見を深めるにあたって、他大学の多くの事例を参考にさせていただきました。特に早稲田大学のライティングセンターの事例 [2] と東京海洋大学でのピア活動中心授業の事例 [3] からは大変多くの事を学ぶことができました。早稲田大学の佐渡島紗織先生・太田裕子先生、東京海洋大学の大島弥生先生には、深く感謝申し上げます。

その他の教育機関や研究機関の先生方、大学教育学会をはじめとする各種学会、多くのライティング関連書籍からも参考になる情報をいただきました。心より感謝申し上げます。

このマニュアルの内容には、科学研究費　挑戦的萌芽研究 (課題番号：25540163) の補助を得て推進した研究の成果が含まれています。

2　大阪大学　アカデミック・ライティング教育の現状

2014 年 4 月現在、大阪大学には、早稲田大学 [2] などで設立されている全学向けライティングセンター組織がありません。後述する様々な取り組みがなされていますが、その規模は小さく対象学生数が限られている状況です。

そのため、全学の学部新入生に対し、アカデミック・ライティングを教育する機会としては、必修共通教育科目「情報活用基礎」での指導を挙げることができますが、ライティング以外に教えるべき項目が多く、十分な時間は確保できていません。

このため、大阪大学では、基礎セミナーを始め各教科を担当する教員が、それれぞれの担当科目の中で、ライティングも教育していく必要があります。

入試の小論文の勉強の際に経験しているのでは？と思うかもしれませんが、入試の経験の有無はアカデミック・ライティング能力の有無に、直接関係しないと思われます。入試の小論文は、主観と経験と洞察に基づいて、限られた時間内に特殊な場所でつくる文章ですから、そのための能力があっても、大学で求めるアカデミック・ライティングができるとは限らないことになります。

2.1　学生（特に新入生）は何がわかってないか

教員は、自分の現在持っている知識、あるいは自分が受けてきた教育の経験から、学生の経験を安直に類推しがちですが、学部新入生は多くのことがわかっていません。（知識を持っていません）そのギャップから、教員の説明不足による学生の理解困難が引き起こされます。

共通教育クラス代表懇談会で、学部 1 年生がライティングで困った経験についてアンケートを集めました。その回答のいくつかを紹介します。

「大学に入学するまでレポートを書く機会はないので、そもそも基本的な枠組みからわからず困った」

「1 セメの初期の段階で字数の多いレポートを出されると書き方もわからないので非常につらい」

「添削されて返ってこないので、レポートの書き方があっているのかわからない」

「教授はレポートの書き方を教えてくれず、書き方がよくわからないまま提出している人が多い」

「初めてレポートを書くときは、形式や調査の方法がわからず困った」

このアンケート結果をみますと、学生（特に新入生）は以下のようなことがわかっていないと思われます。先生がたは、ぜひこの点に留意して指導してくだされば幸いです。

何を問われているのか分からない　「〇〇について述べよ」式の課題をほとんど経験したことがないので、〇〇の何について議論したらよいかがわかりません。課題を自分なりに分析して答えればよいこと、あるいは課題の意図について教員に尋ねてもよいことも知りません。

どのような手順が必要かわからない　ライティングの手順がわからないので、いきなり執筆しようとします。先に資料や情報を集めて整理していないので、書くことがない、書くことがないので書けないという状況に陥ります。

なぜそれだけの分量が必要なのかわからない　主観や経験だけで、よくわからない問題に関して数

千字の文章を書くことは難しいことです。そのため、未知の事柄について字数の多い課題を出されると学生は途方にくれます。アカデミック・ライティングでは、文献や調査・実験結果から得た客観的な証拠を集めて議論するので、ある程度の分量が必要であることを知りません。

必要な形式・倫理・論証法がわからない　実際のライティングを進めるにあたって必要な、提出物の形式に対する基礎知識が欠けています。また倫理に対する認識が充分ではありません。（剽窃はいけないことだと知っている者も多いが、罪悪感が低い）学術的文章は正しい論証法やパラグラフライティングの積み重ねで記述していくとの意識も欠けているように思われます。

2.2　学内アカデミック・ライティング指導の諸活動

大阪大学内では、すでにアカデミック・ライティングそのものを指導する活動が多く行われています。ここでは、筆者らが把握している代表的な例を紹介します。

図書館の各講座　筆者らが開催している「レポートの書き方講座」をはじめ、「論文の書き方 文献の読み方　プチ・ゼミナール」などの講習会が開催され、各回 10 名〜20 名程度の受講者に指導を行っています。

図書館 TA の指導　附属図書館のコモンズスペースには学習支援のための TA が待機し、利用者の要望に応じてレポートや提出物のライティング指導を行っています。

全学教育推進機構の科目　筆者らは、全学共通教育科目の基礎セミナー「はじめてのアカデミックライティング」、「アカデミックライティング入門」「基礎からのアカデミックスキル」などの科目を開設しています。また大学院生向けの科目「学術的文章の作成と指導」も開設しています。2014 年度の受講者数はおよそ 80 名でした。

国際教育交流センターの科目　国際教育交流センターの村岡貴子先生が、「上級専門日本語 (アカデミック・ライティング)」を開設されています。また、大阪大学出版会から「論文作成のための 文章力向上プログラム」[4] と題する書籍を出版されています。

グローバルコラボレーションセンターの科目　グローバルコラボレーションセンターの上田晶子先生が、ライティング指導を含む「アカデミック・スキルズ」を開設されています。

ガイダンス室のラーニングアドバイザー　全学教育推進機構 B 棟 2 階の教務事務室の横に、ガイダンス室が設置されています。そこでは、授業期間中大学院生の TA がラーニングアドバイザーとして待機しており、それぞれの専門分野に応じたレポートの書き方などのアドバイスをしています。

3　学生配布小冊子の紹介

2015 年 4 月入学者に対しては、アカデミック・ライティングのための簡便な小冊子『阪大生のためのアカデミック・ライティング入門』（第 2 版・全 32 頁）[1] を配布いたします。指導すべき項目案についても、その詳細はこの冊子に記述してあります。ここでは、その冊子の中身を項目ごとに簡単に紹介します。

主な内容

1. **はじめに**
2. **アカデミック・ライティングとは**　大学で要求される学術的文章の特徴と作文や感想文との違いを説明しています。
3. **学びの成果に誇りを持とう**　学術的文章の倫理とリスクについて説明しています。これには、剽窃などのルール違反がもたらす深刻なダメージについての警告が含まれています。また、たとえ拙くとも誇りと自信をもってライティングに取り組むことをすすめています。
4. **手順に従い進めよう**　ライティングのプロセスを説明しています。学術的文章の作成には、
   （a）自分なりの「問い」や「答え」を設定すること
   （b）証拠を得るために調査・分析すること
   （c）得られた情報を整理し構成を練ること
   （d）論理的でわかりやすい文章で書くこと
   （e）内容や形式を点検し整えること
   といった手順があることを簡単に解説しています。
5. **調べよう・実験しよう**　情報源の性質とリーディングの基礎を説明しています。インターネット上の情報の注意点や資料の性質の違いについて簡単に解説しています。リーディングの技法としては、おもに多読・速読の技術について紹介しています。
6. **骨組みを決めよう**　文章全体の構成（アウトライン）を決めてから書き出す方法について説明しています。主な論証の方法についても簡単に触れています。
7. **レポートを組み立てよう**　漫然と文章をつなげることをやめ、段落ごとに目的を持って書くことを提案しています。また、引用の具体的な方法や形式にも触れています。
8. **形式を整えて提出しよう**　論文・レポートの書式や形態について具体的に説明しています。

このほかに、文献目録の作成や文章の形を整えるための Microsoft Windows,Word2013 を使用した具体的な文章作成テクニックが紹介されています。また、巻末の「提出前チェックリスト」は、文章の「内容」について確認すべきこと、引用や表記の「マナー」、「形式」を整えるポイントなどがコンパクトにまとめられています。なお、本冊子で言及したライティング関係の参考文献も提示しています。このリストでは、本冊子の内容を補い、知識を発展させる上で有効な書籍を紹介しています。

4　ライティング指導すべき項目案

「学生は何がわかっていないか」とほとんど重複しますが、教員に、科目のなかで触れてほしい指導項目のうち、主なものは、以下のようなものとなると考えます。

◎　大学入学までと大学で求められるライティングの質の違い
◎　課題に対してどう取り組めばよいかの（簡単でも良いので）指針
◎　教員が求める提出物の形式的要件の具体例
◎　教員が受け入れられる論証のタイプ
◎　引用など倫理的なルールはどの範囲を求めるか
◎　提出物評価の具体的方法と基準の説明

4.1　大学入学までの作文などとの違い

同じように文章を書いて出す課題でも、大学で求められるアカデミック・ライティングと小学校・中学校でよくあった「作文」や「感想文」とは、違うものだということを強調しましょう。

「作文」や「感想文」は、自分の思い、考えたことを書くものです。用語は普段使っている言葉で、友達に語りかけるような文体も許されます。レポートやレジュメなどのアカデミック・ライティングの提出物は、**調査結果などの事実をもとに、学術的文章の規範に従って報告するもの**です。その内容には論理の一貫性が求められるといえます。「述べよ」・「論ぜよ」との指示は、関連の項目について字数が埋まるだけ書けばいいのではなく、論理の一貫した説明になっていることを要求している事を強調してください。

4.1.1　調べ学習から抜け出させる

小学校・中学校の「調べ学習」では「調べたものを良くまとめていれば OK」と評価することも多く、その感覚のままでいる新入生もおります。ぜひ調査した根拠情報をもとに自分の論を展開することが重要だと強調してください。

4.2　要求する形式

教員が要求する（提出されると想定している）形式の情報については出来る限り詳細・具体的に指示するようにしてください。用紙の大きさ・用紙の方向と文字の方向・余白の設定・別紙の表紙が必要かどうか・必要情報（表題、提出者氏名、提出者所属情報、提出日など）・引用の仕方と文献情報の書き方・指定文字数などです。

とくに引用の仕方と文献情報の書き方は、学問分野によって規範が異なりますので、各教員が要求する様式を明確に指示してください。加えて「分野により規範が異なるので、色々な様式を経験することは重要なことである」との説明もお願いします。

4.3 剽窃・引用・倫理問題

甘く考えている学生も多いので、厳しく処罰されることを紹介してください。ただ、ダメというだけでは効果が少ないので、なぜ安直な剽窃がダメなのか、引用はどういう目的の行為で、どのようにすれば適切と認めらるのかを説明してください。処罰によるネガティブな禁止でなく、自分の学びの成果に誇りをもつために、進んでそのようなことをしない心持になるよう工夫して指導してください。

4.3.1 CLE の SafeAssign について

大阪大学学習支援システム CLE では、2014 年 2 月より、SafeAssign と呼ばれる剽窃チェック機能を伴う課題システムが利用できるようになりました。可能であれば、このシステムを利用していただき、その機能についてあらかじめ受講者に警告を与えておいてください。CLE の利用法については、サイバーメディアセンターと教育学習支援センター (TLSC) の協催する講習会がありますので、ぜひご利用ください。

4.4 アカデミック・ライティングの組み立て方のこつ（自分の経験を語る）

「課題にどう取り組んでライティングしていけばいいかわからない！」との困惑状態にこたえるために、先生方が普段アカデミック・ライティングを実践している、その経験をぜひ語ってください。

ほとんどの教員は (筆者らがまさにそうですが)、論文・学会発表予稿・研究費申請書類・このマニュアルなど、日々のライティングを七転八倒しながらこなしているのではないでしょうか。教員も苦しみながらライティングしている、簡単なことではないことを紹介し、そうであっても安直に回避せず、その経験を乗り越えてはじめて得られるものがあることや、誠実にこなすことの重要性について語ってください。教員自身の書いた論文などを見せ、苦労話をするのは（たとえその論文の内容が受講生には難しすぎるものであっても）有効と思われます。学生もその経験談を興味を持って聞くことが多いようです。

また、小冊子には書いていないような、なにか独自に工夫していることなどがありましたら、ぜひ紹介してください。（筆者らにも教えてください）

4.4.1 まずは課題を整理→「質問」と「答え」の形式に直してみる

小冊子でも紹介していますが、まず課題をどう詳細化してよいかわからず途方にくれているようなら、課題の内容をシンプルな「問い」と「答え」のペアであらわすこと [5] を試してみるよう助言してください。

4.4.2 アウトラインのまとめ方

調査したり・実験したりして得られた根拠情報を、一貫した正しい論証になるよう並べ、アウトラインをまとめる [5] のは、初学者には難しいものです。この手法も種々あり、マインドマップ・

KJ 法・自己流落書き図など、各自普段利用している手法があると思いますので、その実例を示すなどして、紹介してください。

4.5 パラグラフ・ライティングと用語（分野による違い）

多くの分野では、アカデミック・ライティングに際して、その構成要素である文の塊がパラグラフ [6] の形式であることが望ましいとされています。アウトラインの内容を、文章の塊に展開していく際には、パラグラフの集まりになるよう、意識して書くことを紹介してください。近年高校英語教育では英作文時にパラグラフ・ライティングを意識するよう指導 [7] されていることが多いようです。筆者らは、学生から「パラグラフは英語の場合だけで、日本語で書くときは関係ないと思っていた。」とのコメントをもらったことがあります。そのような誤解がないよう、説明をお願いします。

また、個々の文の書き方も、日常会話と違った、いわゆる硬い言葉を使った表現の多用が求められます。アカデミック・ライティング特有の言葉遣いがあることと、ブログや Twitter の書き込み文とは異なる書きぶりになるよう気を付けることをご指導ください。分野によって同じ言葉を違う意味に使うこと、同じ事柄を違う用語で表現する場合があることなども紹介してください。

4.6 提出物評価の具体的方法と基準の説明

提出物がどう評価されるのかは、受講生の最大の関心事です。ぜひその評価の具体的な方法と基準について、**課題を出した時点**で説明するようにしてください [8]。後述するルーブリックの活用もぜひご検討ください。

4.7 無用な苦手意識の払拭

多くの学生は、アカデミック・ライティングに対する無用な苦手意識をもっているようです [9]。その意識を払拭するよう、教員が説明してください。アカデミック・ライティングは主観・想像力・経験・センスで書くものではありません。特別な経験やセンスがなくとも、手順や型を知ったうえで作成し、フィードバックを受けることで、誰もが向上できるのだということを説明してください。

4.8 小冊子に加え、参考にすべき書籍情報など

配布する小冊子は、最小限の内容にしぼっています。さらに詳細な説明や進んだ内容が知りたい場合は、このマニュアルの参考文献にある書籍を含め、各種ライティング文献を参照するようご指導ください。関西地区 FD 連絡協議会と京都大学高等教育研究開発推進センターが共編した「ライティング指導のヒント」の巻末資料 I 坂本尚志 著『「論文の書き方」本から見るライティング指導の位置』[10](pp.239–248) には多数の書籍情報とその類型による分類情報がありますので、紹介の際の参考になると思われます。

5　1 コマ 90 分で基本的な説明をする場合の提案

ライティング指導を科目に取り入れる方法については、回数・確保する時間などいろいろな段階がありますが、可能であれば 1 コマ 90 分を使って、指導していただくと効果的であろうと考えます。ここでは、そのような 1 コマ分の具体的実施内容のご提案をいたします。重ねて書きますが、この内容を強制する意図があるものではなく、ご自身の実践に際しての参考にしていただければと思います。

1. **導入（5 分）**※予定・進行の説明
2. **アカデミック・ライティングとは（5 分）**※冊子 2〜3 ページの内容を指示して解説。とくに「作文・感想文との違い」に力点を置く。
3. **学びの成果に誇りを持とう（5 分）**※冊子 4〜7 ページの内容を指示して解説。阪大生の一員としては「勿嘗糟粕」の警句は重要。倫理の基本として 5 ページの引用は紹介。阪大の罰則（6 ページ）や不正検出技術（7 ページ）についても言及する。
4. **アカデミック・ライティングのおおまかな手順（5 分）**※冊子 8〜9 ページの内容を指示して解説。とくに 4. 1（8 ページ）の手順を踏むことを強調。
5. **ピアワーク１　あたまのなかを整理する（20 分）**
   １）　まず、シートのワークの枠の中央の円内にキーワードを書く。
   ２）　キーワドから連想する言葉を周りにどんどん書く。
   ３）　あとで仲間になる言葉を色マーカやしるしでグループにする。
   ４）　隣りの人とシートを交換し、言葉やグループの種類について意見を交換する。
   ※時間配分：1）〜2）10 分程度、3）5 分程度、4）5 分程度
   ※「いきなり「問い」と「答え」といわれても…」という初年次学生むけに、1 人でおこなうブレーンストーミングとピアワークを混ぜたワーク。
   ※自分が課題について何を知っていて、何をしらないかを知るのに有効。知っていることをさらに追求しても、知らないことを調べても、自分なりの「問い」や「答え」の発見につながる。
   ※ 最初に円内に書くキーワードは自由で構わないが、初年次学生の場合は、出身国、都道府県、興味のある国・地域など地名や場所にすると書きやすい。
6. **文献・資料を調査しよう（5 分）**※冊子 10〜14 ページの内容について解説。ネットの情報への注意は強調する。図書館の各種サービスに言及し使用するよう促す。調査・研究のための読書は鑑賞し楽しむためのものではなく、情報として「使う」ための読書であることに気づくことが重要。
7. **主な論証の方法（5 分）**※冊子 18 ページの内容について解説。演繹法と帰納法について簡単に触れる。捏造・改竄などについても警告する。なお、授業進行上で時間が足りない場合は、ページのみ指示して飛ばしても良い。
8. **パラグラフライティングとは（5 分）**※冊子 19〜21 ページの内容について説明。パラグラフの定義と特徴について解説。

9. **ピアワーク２　パラグラフライティングをしてみよう（15 分）**
   １）　ワーク 1 で書き出した言葉を参考に、中央の円内のキーワードについて、パラグラフライティングをしてみる。できない場合は、キーワードについて短い文章を 3 つ以上作る。
   ２）　隣りの人とシートを交換し、トピックセンテンスはあるか、関係のない文が混ざっていないか、見出しを付けるとすると何が適当かチェックしてもらう。

   ※時間配分：１）10 分程度、２）5 分程度

   ※簡単なパラグラフライティングの練習。すぐにパラグラフを作ることが難しい場合は、以下の方法を指示。

   １）　キーワードについて短い文章を 3 つ以上作る。
   ２）　トピックセンテンスになりうる文はどれか、全体に見出しを付けるとすると何が適当か指摘してもらう。
10. **適切に引用しよう（8 分）**※冊子 22 ページの内容について説明。各引用法について冊子内にある実例を指示して解説する。出典の明記について注意を促す。（とくにインターネット上の情報について）
11. **形式を整えて提出しよう（7 分）**※冊子 23～27 ページの内容について説明。形式や書式のポイントを解説。なお、文献の表記法（24 ページ）には学問分野によって様々な違いがあることを強調。
12. **おわりに（5 分）**※最後にまとめとして、学術的文章の特徴、作成プロセス、パラグラフ、形式の重要性などを振り返ってまとめる。また、学内の学修サポートを利用することや友人・先輩・教員とコミュニケーションをとることをすすめる。

上記の内容に対応したパワーポイントスライド、作業用シートのひな形データを用意しています。大阪大学リポジトリ OUKA の、このマニュアルと同じページに置いてあります。自由にダウンロードできますので、ぜひご活用ください。

6　ルーブリックを作りましょう

6.1　ルーブリックとはなにか

大量の課題提出物を採点するにあたって、採点時間の短縮や評価の揺れを避けるために、ルーブリック [11],[12]（達成度評価基準の表）を作って活用しましょう。

ルーブリックが、細部の指摘・修正指示でなく、大まかな指示をする形式になっていることは、学ぶ者が自分で気づき修正して行く能力を涵養することにつながります。

このマニュアルでは、ルーブリック作成法や活用法の詳細には触れません。上記の参考書籍を参考にしてくださるとともに、**大阪大学 教育学習支援センター (TLSC) が提供する FD プログラム**にぜひ参加いただきますようお願いします。

6.2　ルーブリックをどう活用するか

採点者は、課題提出物をチェックする際に、ルーブリックの該当箇所に丸をつけたり、アンダーラインを引いたりして、評価段階を示します。

ルーブリックは、**必ず課題を出すときに提示する**ことを心がけてください。受講者の信頼を得るためにも、評価基準の後出しをしない事が肝要です。また、できるだけ短期間のうちに評価し、フィードバックするよう心がけてください。おおむね提出から 2 週間以内が目安とされています。ルーブリックは重要な個人情報ですので、他の受講者が容易に見ることがないよう、提出物の最後につけて返すべきでしょう。

TA と十分に相談し採点基準についての合意が得られれば、ルーブリック記入を TA に任せることも可能になります。

ルーブリックを学生たちと相談して作り上げるという、双方向的活用は、特に課題に取り組む意欲を向上させるようです。時間に余裕があれば、そのような進行にするのも良いと思われます。

6.3　ルーブリックの例

実際筆者らが、基礎セミナーで活用している・活用を計画しているルーブリックの例を次ページ以降で紹介します。各自アレンジし、工夫して活用していただければ幸いです。

表 1　ルーブリックの例（坂尻作成）

受講生確認分

課題	授業の内容を要約し、重要な点について理由をあげて説明すること (50 点)

【構成】	(1) 要約→ (2) 重要点 の構成を取る	1－2－3－4－5
【要約】	大きく簡潔にまとめている	1－2－3－4－5
	内容を項目で適切にまとめている	1－2－3－4－5－6
【重要点】	要約に基づいている	1－2－3－4－5
	理由が明確に述べられている	1－2－3－4－5－6－7
【引用】	資料・図表を適切に引用・利用している	1－2－3－4－5
	形式が守られている	1－2－3－4－5
【全体】	説明が具体的かつ説得的	1－2－3－4－5－6－7
	全体のバランス	1－2－3－4－5

所属　　学籍番号　　氏名

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝　切り取り線　＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

教員控

課題	授業の内容を要約し、重要な点について理由をあげて説明すること (50 点)

【構成】	(1) 要約→ (2) 重要点 の構成を取る	1－2－3－4－5
【要約】	大きく簡潔にまとめている	1－2－3－4－5
	内容を項目で適切にまとめている	1－2－3－4－5－6
【重要点】	要約に基づいている	1－2－3－4－5
	理由が明確に述べられている	1－2－3－4－5－6－7
【引用】	資料・図表を適切に引用・利用している	1－2－3－4－5
	形式が守られている	1－2－3－4－5
【全体】	説明が具体的かつ説得的	1－2－3－4－5－6－7
	全体のバランス	1－2－3－4－5

所属　　学籍番号　　氏名

表 2　ルーブリックの例（堀作成）

課題	大阪大学総合図書館について述べよ
規定	分量は 1500 字〜2000 字、A 4 用紙を縦に使う設定、必ず表紙を付ける
提出	作成した Word ファイルまたは PDF ファイルを CLE の添付で提出する

評価する項目	優秀	合格	がんばりましょう
課題に沿っているか	想定を超える内容になっており、高く評価できる	内容適切	課題内容とあってない
引用はきちんとできているか	きちんとできている	だいたいできている	まったくできていない！　コピペ (剽窃) になっています！
アウトラインの「問い」と「答え」は明確か	明確に理解できる	明確とまでは言えないが、読み取ることができる	アウトラインが明確ではない
パラグラフ・ライティングできているか	きちんとできている	だいたいできているが、パラグラフになっていない箇所がある	パラグラフになっている箇所が非常に少ない
記述は正しい日本語になっているか	きちんとできている	だいたいできているが、文法上・用語使用法に問題がある箇所がある	日本語の文法・用語使用法に大きな間違いがある
文章量は指示どおりか	指示どおりである	若干多い・少ない	まったく指示と異なる
提出物の形式・提出の方法は指示どおりか	指示どおりである	ほとんど指示どおりであるが、指示と異なる箇所がある	まったく指示と異なる
参考文献リストをきちんとつけているか	正しい参考文献リストがある	参考文献リストがあるが、不足の項目がある・書式に問題がある	参考文献リストが無い

参考文献

[1] 堀一成, 坂尻彰宏. 阪大生のための　アカデミック・ライティング入門. 大阪大学 全学教育推進センター, 第 2 版, 2015.

[2] 佐渡島紗織, 太田裕子. 文章チュータリングの理念と実践. ひつじ書房, 2013.

[3] 大島弥生, 池田玲子, 大場理恵子, 加納なおみ, 高橋淑郎, 岩田夏穂. ピアで学ぶ大学生の日本語表現 [第 2 版]. ひつじ書房, 2014.

[4] 村岡貴子, 因京子, 仁科喜久子. 論文作成のための 文章力向上プログラム. 大阪大学出版会, 2013.

[5] 戸田山和久. 新版　論文の教室. NHK BOOKS 1194. NHK 出版, 2012.

[6] 木下是雄. レポートの組み立て方. 筑摩書房, 1994.

[7] 大井恭子, 田畑光義, 松井孝志. パラグラフ・ライティング指導入門. 大修館書店, 2008.

[8] 佐藤 浩章編著. 大学教員のための授業方法とデザイン. 玉川大学出版部, 2010.

[9] 渡辺哲司. 「書くのが苦手」をみきわめる. 学術出版会, 2010.

[10] 関西地区 FD 連絡協議会, 京都大学高等教育研究開発推進センター編. 思考し表現する学生を育てる ライティング指導のヒント. ミネルヴァ書房, 2013.

[11] Dannelle D.Stevens and Antonia J.Levi. *Introduction to Rubrics.* Stylus Publishing, second edition, 2013.

[12] Dannelle D.Stevens and Antonia J.Levi. 大学教員のためのルーブリック評価入門. 玉川大学出版部, 2014. 佐藤 浩章 監訳, 井上 敏憲 訳, 俣野 秀典 訳.